

## Beyond Wit and Grit: Rethinking the Keys to Success | Howard Gardner | TEDxBeaconStreet

成功の秘訣は何かと問われたら、数年前だったら、こんな簡単な答えをしていたでしょう。「まずは頭が良くなくてはならない。そして努力を怠らない。」もっと歯切れよく言えば、ウィッツ（知性、wit の複数形）があること、つまり高い知能（intelligent）を持っているということです。例えばこのスライドのアルバート・アインシュタインのように。

そして、ガッツ( grit:やり抜く力)も必要です。一生懸命に努力し続け目的を貫かなくてははいけません。運動選手のように。この走り高跳びの選手のようにね。

もちろん、このウィット(wit)とガッツ( grit:やり抜く力)については長年、考えてきたのですが、今日、自分の考えがどのように進化して来たかを振り返りながら話したいと思います。

ここに、ウィッツ(wits)とガッツ( grits:やり抜く力)があるといいなと思う例があります。まずはこの若者です。ウィッツとガッツがなければ、テストで失敗してしまいます。

このスライドには先ほどの若者より、ちょっとだけ年上の人達があります。彼らにもウィッツ(wits)とガッツ( grits:やり抜く力)があると望みたいですね。何故かと言うと、ここはホワイトハウスの状況分析室で、彼らはとても厳しい決断を迫られています。ですから、彼らにもウィッツ(wits)とガッツ( grits:やり抜く力)があることを祈りましょう。

本日、私は心理学者として約 40 年間にわたり取り組んできた研究を振り返っていきたいと思います。その間、ウィッツ(wits)とガッツ( grits:やり抜く力)という重要な事柄について自分の考えが大きく変わってきました。特にその辺に関して、話したいと思っています。このスライドの写真はごく数年前の私です。研究を始めたばかりの頃です。

当時、私はインテリジェンス (intelligence:知性、知能) とはたった一つのものと信じていました。つまり、頭 (mind or brain) の中にはたった 1 台のコンピュータがあるだけで、それが高機能であればすべてがうまく行き、そうでなければ、残念ながら、全てがダメだというようにね。もちろん、当時は知能指数テストも信じていました。ご出席していらっしゃる皆さんも受けたことがあるでしょう。報告によれば、IQ テストを受ければ、自分は賢いとわかるし、不運にも自分は賢くないということも判明します。自分が賢くないと思うのは辛いですね。ずっとそう思いながらその後の人生を送るなんて不幸だと思います。

私は幼い子どもについて研究したことがあります。被験者の子ども達は、年齢がまちまちで、個々の才能も異なり、バックグラウンドもそれぞれ違っていました。そこで子ども達が様々なことをしているのを観察しました。その結果、子どもがある一つのことに長けていても、その他のことに長けているとは限らないことに気付きました。

次にもっと印象的だった実験について話したいと思います。私は脳損傷の患者を被験者として研究してきました。被験者は不幸にも脳卒中を患った人達や脳のある部位に機能障害を持った人達でした。脳損傷について唯一重要な点はそれが左に起きているか右に起きているか、前頭葉か後頭葉に起きているかです。ご存知と思いますが損傷の部位によりどの機能が失われどの機能が維持されるのかがわかります。全く正反対のプロフィールを持つ二人の患者がいるとしましょう。二人のうち一人がある領域に優れているということは、もう一人はまさにその領域が弱いということです。

1980 年代このことがきっかけで私は発達心理学、様々な文化、そして脳とその特化した部位について研究するようになりました。この結果をもとに私は **FRAMES of MIND** (心の枠組み) を執筆しました。この本のサブタイトルは **The Multiple Intelligences Theory**(マルチプル・インテリジェンス：多知能論)ですが、大抵、短く **MI 理論**とされています。この本によって私は世の中に知られるようになり、未だに **MI 理論**で私の名が知れ渡ってい

ます。この本は 400 ページもありますが、厚い本の良いところは簡略版が入手できます、特に TED での講演による簡略版が。本の中で最も私が言いたかったことはたった一台のコンピュータというよりはむしろ、少なくとも 7、8 台のコンピュータが私たち皆に備わっているということです。7、8 台のコンピュータのうちのある一台がうまく機能する人もいれば、それとは別のコンピュータがよく機能する人もいます。だからこそ、複数のインテリジェンス（知性・知能）について考える必要があるのです。

では、その人間が持つコンピュータについて写真を使いながら説明しましょう。言語的知能とは、詩人、エミリー・ディケンズ、エドガー・アラン・ポー、CNN ジャーナリストのようなインテリジェンスです。

2 番目のものは論理的数学的インテリジェンスです。科学者、コンピュータ・プログラマーがその高いインテリジェンスを持っています。

もしこの二つのインテリジェンスが高ければ、学校にいる限りあなたは賢いと思っていて差し支えありません。

高速道路に出たり、ましてや森やジャングルなどに入ったりしないでください。もしそういう場所に行けば他のインテリジェンスが重要になることを思い知るでしょう。

音楽的インテリジェンスとは指揮者などが持ち合わせているインテリジェンスです。偉大な演奏家であるヨーヨー・マのようなインテリジェンスです。左の写真は神童と言われていた頃のものの、右の写真は現在のヨーヨーで、私たちは彼を崇拜しています。

4 番目のインテリジェンスは空間的なものです。それは場所や空間を扱うことに関してのインテリジェンスです。一定範囲の空間を扱うのであれば、チェス・プレイヤーやもっと広い空間を扱うのであれば船乗り、操縦士がこの類いのインテリジェンスを持っています。

5 番目のものは身体・運動感覚のインテリジェンスです。運動選手のように体全体を使うものもあれば鉄や木材、その他様々な材料を使う手先の技術もこのインテリジェンスと言えます。

6 番目は対人関係的のインテリジェンスです。他者の気持ちを理解するインテリジェンスです。マーティン・ルーサー・キング・ジュニアは他者の心を理解でき、人々を鼓舞する秘訣を心得ていました。つまり、彼には高い対人関係的インテリジェンスがありました。もう少し卑近な例でいえば、営業マンもそうです。車を買わせるためなら、もの見事に買い手を説得しますから。たとえ、買い手が車種や売値が気に入らないものでもね。これもまた対人関係的インテリジェンスです。

7 番目のインテリジェンスは内省的インテリジェンスです。自分自身を理解することです。瞑想家にはこのインテリジェンスがあります。精神分析医にかかるなら、その目的は自己理解ですよ。

近年、私はもう一つのインテリジェンスを加えました。それは博物学者的インテリジェンスです。このインテリジェンスがあれば、植物を区別したり、動物とコミュニケーションしたりさえできます。この写真の女性はジェーン・グッドールで、彼女はお気に入りのチンパンジーと話しています。これらが 8 つのインテリジェンスです。

私はこのことについてマルチプル・インテリジェンスという本にまとめました。この本の中で私にとっての重要な変更点はウィット（知性・知能）を単数形から複数形のウィッツに変えたということです。

さあ、皆さんにテークアウト（お持ち帰り）してもらいたいものがあります。

私たちには皆、これら8つのインテリジェンス（知性・知能）があります。

これらのインテリジェンスがあるから、認知的な意味で私たちは人間なんです。でも二人として同じインテリジェンスを同じ割合、同じ分量で有していない、たとえ一卵性双生児であっても同じプロフィールでないのです。驚くべきことですよね。私たち各々が違ったインテリジェンスを有しているから、学校や仕事ですること、人との付き合い方、自分との向き合い方に影響が及ぶのです。なぜかという、私たち、皆、それぞれが8つのインテリジェンスのどれかが優れているからです。すべてのインテリジェンスが均一ということはありませんし、インテリジェンスが全くないという人はいません。

そうなるときっと皆さんはそれぞれのインテリジェンスについて査定したくなるでしょうね。「どのようにした査定できるでしょうか。」と実際、多くの人が私に質問してきました。筆記試験ではそれを見極めることはできません。筆記試験は言語的インテリジェンスと論理的数学的インテリジェンス専用のものであるからです。この二つのインテリジェンスが良ければテストの結果も良くなります。

従って、個々人のすることを観察し実際にどのインテリジェンスを駆使しているかもしくは駆使していないかを観察できる環境を創る必要があります。では私たちが子ども達をどうやって観察したかを紹介します。

子供たちが日常よく目にするものを組み立てたりバラバラにしたりするような機会を与え、それを観察します。これにより、空間的インテリジェンスや身体的運動感覚的インテリジェンスを見ることができます。音楽的能力を見るには子ども達が音楽を創れるか、聞いた音楽のメロディを再生できるかを調べました。言語的インテリジェンスは新しい語句や言語が学修できるか、正しいトーンや強勢、抑揚で発話できるかを観察します。細かい運動スキル（身体的運動感覚的）を見るには、このスライドのようにします。これを注意深くしっかりと握らなければ、ひどい音が鳴ります。もしくはきちんと床を歩けず、ワイヤーにつまずくとひどく嫌な音が出ます。博物学者的インテリジェンス、子どもは拡大レンズを使ったときと裸眼で見るときのどのように区別するのでしょうか。さて、ちょっと面白いゲームの例を紹介しましょう。ただのボードゲームですがこれにより、数(論理的数学的)のインテリジェンスが知ることができます。それだけではなく対人関係的インテリジェンスも分かります。というのは幼い子供でも、自分が知っていることを他の人は知らないと分かれば、その人を騙すことができます。4歳頃までに人を騙すことができれば、対人関係的インテリジェンスがその子供にはあるという印なんです。でもそれ以降になったら、そうさせないように教え込まないといけません。

さて、私どもはマルチプル・インテリジェンス(多知能論) オアシスというウェブサイトを作りました。オアシスという名前はかなり考え抜いた比喩的表現なんです。砂漠のような、何もなくて見つけられた滋養のある場所という意味です。その砂漠にはマルチプル・インテリジェンスについての誤解があります。例えば皮膚紋学、変な言葉ですね。その皮膚紋学によれば指紋を見れば、賢さが分かるということです。

ナンセンスな話です。だから私たちは皮膚紋学についてウェブサイトで説明しました。

今からお話する例はもっと深刻なもので20年前、オーストラリアのある州で起きました。

そこではカリキュラム全てをマルチプル・インテリジェンスに基づいて構築しました。

私はとても嬉しく思いました。彼らはとても意欲的だと感心しました。

しかし、その後カリキュラムの一部が人種や民族別のリストになっていることを発見しました。

どの人種、民族がどのインテリジェンスを持ち、どのインテリジェンスが足りないか。

私は驚愕しました。私の考えの誤用も甚だしく、また、作成されたものには何の裏付けもありません。

私はオーストラリアのテレビに実際に出演し

「済みませんがこの理論を使わないで下さい。」と言いました。使用は中止され、安心しました。

この出来事により私は自問するようになりました。多くの学者も自問しなくてはなりません。

そうすることにより私たちは考えを発展させることができます。自分たちの考えを話し、そしてその考えを利用していく、でもその話した内容を仮に誤用されたとしましょう。その際の私たちの責任は何でしょうか。自分でオアシスのようなウェブなどを通して言わなければ、誰も何も言ってくれないだろうということに気がきました。さて、ここまでに認知、思考、インテリジェンスについて考えてきました。

さて、昨今、教育的環境においては「思考力」から

「社会的、情緒的、個人的な特色」についてもっと考えるようになっています。

今一番脚光を浴びているのはガッツ (grit:やり抜く力) でしょう。

ガッツについてはペンシルベニア大学の心理学者アンジェラ・ダクワースが書きました。

ポール・タフというジャーナリストが「もし自分の子供を成功させたいなら

その子にはガッツ (grits:やり抜く力) を持たせることが必要だ。」と発言してから有名になりました。まさにその通り、賛成です。

誰がガッツに反対するでしょう。私だってガッツが欲しいし、子どもにも

孫にもガッツを持ってもらいたいと思っています。そればかりか誰にもガッツを持ってもらいたいと思っています。でもちょっと考え下さい。

ヒトラーだってナチスの突撃隊員だって皆ガッツを持っていたことに気が付いくでしょう。

彼らにはガッツがあった、それ自体は問題ではありません。問題なのは

ガッツを悪用したことです。直近の例で言えば、いわゆる”the smartest guys in the room” (『エンロン 巨大企業はいかにして崩壊したのか?』) があります。彼らはエンロンという大企業を発展させ、エンロンは価値ある企業となりました。エンロンは企業としても大変努力してきましたが、資産をごまかしまた国のエネルギー価格もごまかしました。

エンロンが破綻し、多くの人々が仕事や、年金を失いました。繰り返しますがガッツがあるか、ないかが問題ではなくガッツをどこに注ぐかが重要です。ガッツを持つことは素晴らしいことです。さて、マルティプル・インテリジェンスの発表後20年、私と妻が興味をもって研究してきたことは

優れた人間とは、優れた労働者とは、そして優れた市民と何であるかということです。多分アイコンを示したら、分かり易いでしょう。

ネルソン・マンデラ、大変尊敬されています。彼は南アフリカの戦闘状態にあるグループを平和的にまとめました。

エレノア・ルーズベルト、彼女が育った頃、彼女には選挙権さえありませんでした。しかし彼女は思想的な意味で合衆国の指導者となり、夫のルーズベルト大統領に良い影響を与えました。

マハトマ・ガンジー、私のヒーローです。彼はたとえ意見が対立しても、

暴力を使えば、世界は崩壊するということを誰よりも理解していました。

非暴力主義思想は私たちの時代にも、そして今後もずっと重要となるでしょう。

さて、研究者と言えどプロジェクトということになりますが、私たちはグッド・ワーク・プロジェクトと言う名前のプロジェクトを立ち上げました。最終的にはそのプロジェクト名はグッド・プロジェクトとなりました。そしてこのスライドに書かれているような素晴らしい人々と一緒に研究しています。勿論

あなたはグッド・ワークとは何だろうと思っているかもしれませんが、20年間、1200名の人々、9つの職業、

でもMIの説明でしてきたように、簡単に言います。

グッド・ワークとは弁護士や判事、科学者、医師、化学者そして教師の仕事の中から時として見いだせることができます。

グッド・ワークとは **Excellence**(優れていること)、**engaged**(専念していること)、**Ethical**(倫理に適っている)の三つの構成要素からできています。

では「教える」ということで説明してみましょう。優れた教員とは自分の教えることを知っています。

教える内容をいつも更新し、仕事に熱心で、学校の仕事を楽しみにしていて、

生徒のことが好きで、学校に行き生徒を相手に働くことを楽しみにしています。これから私はグッド・ワークと倫理観について集中して講演をしたいと思います。

優れた仕事をする人は正しい倫理観を持ち、難しい決断にもどのようにしたらよいか心得ていて、適切な結論を導くために努力します。

たとえ、適切な決断が下せなかったとしても次回はさらに良い決断を下そうと思います。

私たちはこれを、誰もが知っているダブルヘリックスのDNAを振って、トリプルヘリックスとよんでいます。Excellence(優れていること)、engaged(専念していること)、Ethical(倫理に適っている)でなければグッド・ワークの正式認可はおりません。

20年の研究を経て、私たちはグッド・ワークの情報源となるグッド・プロジェクトのウェブサイトも立ち上げました。その中で私たちはグッド・ワーク、グッド・プレイ(デジタル・メディアと倫理観)、グッド・シティズン(市民)、グッド・コラボレーション(協力)について説明しています。また私たちはゲーム、装置、道具など

を供給し人々が優れた人となるように努力したり、協力したりできるようにしたいと考えています。これがグッド・ワークのツール一式です。

グッド・ワークのツール・キット一式から良い例を紹介します。この例は実際に起きた話ですが写真の人物は本人ではありません。名前も変えてありますが、デビーという高校生の話です。もしあなたが学生もしくは教員という立場にあり、このデビーの話聞いてあなたはどうすべきか決断しなくてはなりません。デビーは高校の新聞部の優秀なジャーナリストであり、エディターです。そして彼女の祖父はニューヨークタイムズの有名な記者です。高校で暴行事件が起きました。デビーの記者としての仕事はその事件に関して記事を書くことです。彼女自身もそのように自覚しています。ところがそのとき、校長がデビーを呼び出して、こう告げました。「デビー、暴行事件に関する記事は書かないように。来週、入学者のための学校説明会があるのにそんな事件が知れたら、誰もこの学校に入学したいと思わなくなってしまうからね。だからこれに関してはいっさい書くことを禁じます。」デビーは倫理的なディレンマに陥ってしまいました。そこで帰宅して母親に相談しました。すると母親は彼女を抱きしめて「デビー、あなたは立派だわ、お祖父さんが聞いたら、きっと自慢に思うでしょうね。ジャーナリストとしてそう考えることは本当に素晴らしいことよ。でも弟のデディーが来年、あなたと同じ学校に行きたがっているか

ら、もしデビーが記事を出せばどうなるのかしら。テディーは学校に入学できないかもしれないわね。何をすべきかよく考えてね。これこそ、倫理上のディレンマです。デビーはジャーナリストして良い仕事がしたい。

これが一つの考えです。これに対立する考えは学校というコミュニティの中で良い一員でいたい。そうであるなら何をすべきか。そして家庭内でも良い子でいたい。両親や弟が望むことをしてあげたい。

こういったことが倫理的ディレンマです。優れた人間、優れた仕事をする人、そして優れた市民であるとは何か、それを理解するために私たちは研究をしています。そこで、特にあなたが哲学者みたいな人であれば、恐らく誰が「優れた」の定義をするのだろうかと思うでしょうね。

一つの答えはこれです。最高裁です。そこにはある種の権威がありますから。でもあなたも私のように最高裁の結論に必ずしも同意するとは限らないのであれば、もう一つ、もっと良い答えがあります。その答えには多くの研究結果による裏付けもあります。それは自分の周囲にいる人々と話すこと、意思疎通をはかることです。教員集団として私たちは何年も一緒に働いてきました。問題が起きると私たちは実際に会って話をします。そして何をすべきかについて決定するために努力してから、実行するのです。もしそれが駄目なら次にはもっと上手くできるように努力するのです。私たちはこれを共通 (common) の場所を創ると言っています。話し合いをするには実際に人と会って話したほうがオンラインより良いでしょう。会って話ができないならオンラインでもしないよりはましです。あなたは向上したいと思っても、

一人では無理です。あなたが知っている人で信頼できる人を持つことが必要です。その人に自分が手摺っている問題を相談することが必要なんです。

さて、私の40年間の研究から皆さんテークアウトしてもらいたいものが二つあります。まず第一に、人は皆、賢いがその賢さは人それぞれ異なる。このことが、自分自身をどのようにとらえるか、そして他の人達とどのように交流するかを影響する。第二にガッツ (やり抜くこと) を持つだけでは充分じゃない。私たちはそのガッツをどのように利用するかを見極め、良いことのために使われるようにこれからも弛みなく努力する必要がある。

ここで、今回の話をまとめや質問の代わりに、こんなふうにツイッターしましょうか。ツイッターをしてみてください。いいですか。まず wit(知性、知能)を複数形にスペルし grit(ガッツ; やり抜く力)の前に good を書いて下さい。Multiple Wits (インテリジェンスは一つではない) そして Good Grits(良いことのためにガッツをもとう。) ご清聴ありがとう。